

最澄が描いた日本文化

—森羅万象に認められるブツの資格—

小林 信彦

A¹

人間以外の動物がブツになる準備をするのは極めて困難である

中国語に翻訳されたマハーヤーナ（大乘）の文献には、“一切衆生悉皆成佛”（すべての衆生はみなブツになる）という言葉があります。仏教文献で“衆生”（sattva）と言われているのは、人間だけでなく人間以外の動物（tiryañc/畜生）も含まれます。そうしますと、どんな動物でも無条件で直ちにブツになれるかということ、決してそうではありません。

ブツになるには 1296×10^{57} 年にわたる準備が必要とされています。これは3にゼロが51付く回数（ 3×10^{51} ）だけ宇宙が発生と消滅を繰り返す時間に相当し、これは中国で“三阿僧祇劫”と呼ばれます（『阿毘達磨俱舍論』12, 『大正新脩大藏經』29, 63.b.15-c.14）。これほど長期にわたって弛まず準備を続けなければならないのです。

準備には二つの局面があります。究極の真理を完全に理解できるように、せっせと知恵を磨きブツの教えを学ぶこと、これが一つ目の局面です。自分の準備だけに専念するのではなく、他人がブツになるのを助けること、これが二つ目の局面です。この面での準備活動を“ボーディサットヴァの活動”（菩薩行）と言います。遙か遠い未来にブツになるのには、果てしない程の時間をかけて二つの局面で準備を続けなければならないのです。

チンパンジーやゴリラの身体は、ブッダになる準備をする上で重大な支障があります。まず、大脳の言語中枢が欠けていますので、ブッダの教えを聞かされても、反応することがありません。また、ほかの者もブッダになれるように側面から協力することが要請されていますが、チンパンジーやゴリラの身体は、これを実践するのにいささか不便な構造をしています。このように、チンパンジーやゴリラの体をしていると、ブッダになる準備をするのは極めて困難です。ナメクジウオやホヤなら、なおさらのことです。

そうしますと、人間以外の動物がブッダなる準備をすることなど、初めから話題にしなければよさそうなものですが、インド人は特異な死後観を構築してしまっていて、人間と他の動物の間に一線を引くわけにいかないのです。インドでは身体が死んでも「心」(vijñāna)は死なず、受精直後に発生した胚の原型に侵入します。「心」を宿した胚は胎児に成長し、やがて出産があって誕生となります。こうして新しい生涯が始まります。

ナメクジウオやホヤの身体に「心」が宿っている限り、ブッダになる準備をするのはほぼ絶望的です。しかしながら、ナメクジウオやホヤの身体に宿っていた「心」は、身体が死んだ時には別の身体へ移ります(「心の移転」)。新しく移ったのが人間の身体であったらしめたものです。人間としての生涯を送っている間に、ブッダになる準備をどんどん進めればよいのです。そしてその後も、人間や動物など、いろんなものの身体に移動を繰り返しながら、「心」は活動し続けるのですが、人間として生きる回数が多ければ多いほど、ブッダになる準備が捗るということになります。

このようにして、宇宙が発生と消滅を限りなく繰り返す間、倦むことなく頑張り続ければ、考えるだけでも気の速くなるような遙か遠い未来にブッダになる可能性があります。ブッダになれば「心」が消滅しますから、もう二度と別の身体に移転することはありません。ここで注意すべきは、最後の生涯では必ず人間の身体をとっていなければならないことです。ブッダになる直前の生涯で人間以外の動物の身体に宿るわけにはいかないのです。

無限に近いほど「心の移転」を繰り返して準備を重ねても、ラストスパー

最澄が描いた日本文化

トをきかせるべき最終段階で支障ある身体をしていては、ブッダになりようがありません。どんなに立派な生涯をそれまで限りなく繰り返していても、最後の生涯で「人間以外の動物」の身体をとっている限り、ブッダになることができないのです。

“すべての動物はみなブッダになる可能性がある”という言葉は、インド文化の中で成立した表現でありまして、「心の移転」を前提として構築されたものです。したがって、この前提を視野に入れない限り、その真意を汲み取ることはできないのです。

A²

仏教では植物と鉱物に「心」がない

仏教で関心はもっぱら人間とその「心」の移動先である動物にあり、植物と鉱物から成る自然界は背景に過ぎません。インド文化圏の人々にとりまして、「心の移転」は議論の余地のない自然現象であり、これに関与するのは「心を備えているもの」(sattva/有情)だけです。自然を構成する植物や無機物は、「心」を備えた人間と動物の活動する場を提供するに過ぎません。仏教の体系で、「有情世界」(sattva-loka)と「器世界」(bhājana-loka)は相互排他的な関係にあるのです。ちなみに、仏教の文献では自然が讃えられることはありません。

仏教でブッダになる可能性があるとして認められているのは、「心」を備えた存在(動物)に限られています。『首楞嚴三昧經』に「身業、口に随ひ、口業、意に随ふ」(『大正新脩大藏經』15, 635)と言われますように、身体を用いる行動は言語による意志表明を前提とし、言語による意志表明は「心」による思考を前提とします。自分で身体を動かさず音声を発しない草木や岩石は、「心」が備わっていないとされるのです。

太陽の動きにつれて向きを変えるヒマワリのように、植物も自分で動いているように見えることがありますが、仏教の立場からすれば、これは鉄が磁石につれて動くのと同じということになります。鉄に内在する「心」が磁石

を求めているのではないように、ヒマワリに内在する「心」が太陽を求めているのではないということになります。ネコがカツオブシに向かって動くのは「心」が機能するからですが、ヒマワリが太陽の方に向かって動くのは、鉄が磁石の方に向かって動くのと同じ自然現象であり、「心」が機能するからではないということになります。

このように、仏教の体系で「心」が宿るのは自ら動くものだけであり、この点で植物と鉱物は動物と次元を異にする存在と見なされます。自分で動くことがない植物と鉱物に「心」がないことは、仏教文化圏であまりにも自明のことですので、バーヴァヴィヴェカ (bhāvaviveka) の『マディヤマカフリダヤ-カーリカー』 (madhyamakahrdaya-kārikā) で論じられている (川崎信定, 『一切智思想の研究』, 221-234) を除けば、話題として取り上げられることさえありません。

B¹

最澄によると、人間以外の動物もそのままジャウブツできる

最澄 (767-822) は“チクシャウ (畜生) の身体のまま、ジャウブツ (成佛) できる”と言い張ります。チクシャウは家畜に限られず、「人間以外の動物」です。そうしますと、ナメクジウオやホヤどころか、シヨウジョウバエもそのままの姿でブツ (佛) になれるということになります。脊椎のないブツや卵を産むブツがいてもよいということになるのです。最澄にとりまして、「人間以外の動物」がブツになるのは、極めて困難であるにしても、起こりえることでありました。著書『法華秀句』の中で、最澄は次のように言っています。

當に知るべし。此の文、難成の趣を明らかにし、經の力用を顯はす。六趣の中、是れ畜生の趣なり。不善報を明かにす。……然りと雖も、妙法蓮華の甚深微妙の力、具に〔智と徳の〕二嚴の用を得。明かに知る。法華の力用、諸經中の寶にして、世に希有なる所なるを。(『法華秀句』下, 『傳教大師全集』3, 261.8-11)

最澄が描いた日本文化

最澄が言うには、「人間以外の動物」の身体をとっていたのでは、ゼンゴフ（善業）を重ねることができず、ゼンゴフの究極的な報いとしてのジャウブツが期待できません（不善報）。このように、「人間以外の動物」は、ジャウブツが困難な存在（難成趣）です。しかしながら、最澄によりますと、『妙法蓮華經』に潜在する超自然力が発動すれば、「人間以外の動物」もそのままの姿でジャウブツできるというのです。最澄にとりまして、ジャウブツは努力して達成すべきものではなく、經典に宿る呪力をうまく使って手取り早く実現すべきものなのです。

湛然の表現（『法華文句記』、『大正新脩大藏經』34, 314.b.24）を借りて、そのままの身体でジャウブツするプロセスを名付けて、最澄は“ソクシン・ジャウブツ”（即身成佛）と呼びます。仏教のゴリラやチンパンジーはブツダになる準備をすることさえできませんが、日本のショウジョウバエは準備をするまでもなく、そのままの姿でブツになれるのです。

哀れな仏教のショウジョウバエは、限りなく繰り返して人間として生まれ、 3×10^{31} 回も宇宙が発生し消滅する間、頑張り続けなければなりません、インド文化と縁がない日本のショウジョウバエは、そのままの姿でブツになれるのです。最澄にとりまして、ジャウブツは「心の移転」を前提としないプロセスなのです。そして、何の努力もいない作業なのです。

こうして、インド文化圏で構想された仏教では、人間がブツダになる準備をするのさえ、 3×10^{31} 回も宇宙が発生と消滅を繰り返すのと同じ時間がかかるのに、日本文化圏で最澄が構想したブツケウ（佛教）では、昆虫でさえ準備抜きでそのままの姿でブツになれるのです。この点から見ても、仏教のブツダと日本のブツは違った次元にあるものです。

『妙法蓮華經』のどこを探しても、「ショウジョウバエがそのままの姿でブツダになる」などということを正当付ける言葉は見つかりません。仏教の伝承では、脊椎のないブツダや卵を産むブツダは、ゴリラやチンパンジーの体をしたブツダと同じように、説話の中でさえ登場することがないのです。ブツダになることは、最高度の知的作業を必須の条件とし、多岐にわたる「ボー

ディサットヴァの活動」を前提とします。そうしますと、ショウジョウバエの身体のままでもなれるブツは、仏教のブツとは全く別のものということになります。最澄は何か仏教とは関係がないものを“ブツ”と呼んでいるのです。

『妙法蓮華經』の超自然力のお陰で、ナーガ (nāga/龍) の娘がたちまちのうちにブツになった」という話が『妙法蓮華經』にあります。ナーガは現実に存在する動物ではなく想像上の動物です。シャーキャ-ブツダ (śākya-buddha/釋迦佛) が『妙法蓮華經』を説いた時、神々や人間と並んでナーガが会場にいました。知力と言語理解能力において、ナーガは極めて優れているのです。ブツダになったナーガ娘は特に優秀で、誰よりも記憶力と理解力に優れ、この上なく憐れみ深く、真理を会得しようとする強い意志がありました。

『妙法蓮華經』の威力があったとしても、これほど早くブツになれたのは、もともと奇跡的に優秀であったからこそ可能であったのです。このナーガ娘に可能であったからといって、そこいらを歩き回っている凡庸な犬や猫にもできるわけではありません。『妙法蓮華經』が伝えるナーガ娘の話は、「人間以外の動物」の身体のままブツになる可能性を保証するものではないのです。

ところが、このナーガの娘の話の根拠にして、最澄はチクシャウ-ジャウブツ (畜生成佛) を主張しました。仏教文献に登場するナーガは、最澄の意識の中で、世にも恐ろしいリュウ (龍) に変換されていたのです。インドのナーガを知らない最澄にとりまして、この話に登場する爬虫類の化け物は、荒々しい鱗で覆われ、四本の足に鋭い爪があります。言語を理解することもなければ、国家を経営したりすることも無いのです。

爬虫類の化け物がブツになれる以上、知力や情緒が不十分な動物も、そのままの姿でブツになれるということになります。最澄の意識の底にあったのは、仏教の世界観とは全く別のものでありました。『妙法蓮華經』のテキストは、最澄が仏教を体系的に理解するのには役立ちませんでした。最澄の

潜在意識を浮上させる触媒として効果がありました。

B²

最澄によると、動物以外のものもそのままじゃウブツできる

最澄が構想していたブツシャウ（佛性）は、「人間以外の動物」に認められるどころか、草や木にも石や岩の中にも認められます。植物や鉱物にもブツになる機会が与えられていることになります。主著『守護國界章』で、最澄は次のように言っています。

若し眞如非因と言はば、天親の論に違ふ。其の論文に、二空に顯はさる所の眞如を云ふ。應得因と爲すが故に。（『守護國界章』下之上、『傳教大師全集』2, 523.9-10）

最澄によりますと、シンニョ（眞如）というものが万物に内在し、それがブツになる要因です。そうしますと、この世に存在するすべてのものはブツになることになります。したがって、最澄に立場からしますと、シンニョをブツになる要因と認めないのは間違いということになります。

そこで、最澄は自らの主張の根拠を「天親の論」に求めます。ここで「天親の論」というのは、ヴァスヴァンドゥ（vasubandhu/天親）の著作と伝えられる『佛性論』のことです。この『佛性論』では、シンニョがブツになる要因と認められていると言うのです。このシンニョが万物に内在する以上、動物であろうと植物であろうと、生物であろうと無機物であろうと、すべてブツになるというのです。

しかしながら、ここで最澄はヴァスバンドゥの主張と取り組んでいるのではなく、中国で天台の体系を整理した湛然（711-782）の言葉を取り上げているのです。最澄は湛然を読んでヴァスバンドゥを孫引きしているのですが、湛然の文脈を全く理解していません。かなり特異な湛然の立場を理解するだけの学力がないまま、ヴァスバンドゥと湛然と自分自身を同じ場に置き、はなはだ無邪気に理屈にもならない理屈を捏ね回しているのです。このような知的不誠実さは、今日に至るまで1000年以上にわたって、日本人の仏典研究

に一貫して認められる特色です。

湛然が“佛性”と言う際の“佛”とは、長い努力をして一人一人の人間がなるブッダではなく、“法佛”と呼ばれるものでありまして、真理そのものです。そして、それを前提にして“佛性”をいう語を使っています。しかも、その“法佛”を特殊な文脈で使っています。湛然によりますと、「眞如」と同じように、「佛性」は外的条件によって現象化します（隨縁）。自然界（器世界）も「佛性」の変化形態ということになります。こうして、湛然は動物だけではなく、植物にも無機物にも根源的な存在としての「佛性」を認めます。仏教の体系から逸脱して、湛然は“佛性”という語を使っているのです。

そして、“眞如”という語を使う際にも湛然は仏教の体系から逸脱しています。湛然が使う“眞如”という語が指すのは、「世界の真の状態」ではなく、「現象界に存在するすべてのものに内在する究極実体」なのです。そのように「佛性」の概念と「眞如」の概念を勝手に定めて両者の異同を論じた上で、湛然は二つが関与する範囲を異にしないと主張しているのです。こうして湛然は「佛性」と「眞如」を同一視するわけですが、その際に「ブッダになる」という仏教の目標は全く念頭にないのです。

中国人の湛然は“すべてのものに不変の究極実在が内在する”と言っているののでして、“すべての物体にブッダになる可能性がある”と言っているのではありません。ブッダになれる者の資格に興味があったわけではないのです。湛然にとりましては、「眞如」と同じように「佛性」も究極実在でありました。この点については最澄は全く理解していませんでした。

さて、『拂惑袖中策』という文献が日本天台宗に伝えられていまして、古くから最澄の著作と信じられています。誰が書いたのか確かでないのですが、少なくともシンニョの問題につきましては、最澄の意図をよく伝え、しかも文体が明晰で、『守護國界章』の不明瞭さをよく補っています。

天親の佛性論に云く。「佛性と言ふは、人法の二空に顯はさる所の眞如なり」と。何ぞ「眞如は情無情に遍し、佛性は局^{かき}りて有情に有るのみ」と云ふや。（『拂惑袖中策』下、『傳教大師全集』3, 316.7-9）

最澄が描いた日本文化

最澄は『佛性論』を文献根拠としてブッシャウとシンニョの同一性を主張しました。そして、それを根拠にブッシャウが「心を備えていないもの」にも内在すると結論しようとしています。しながら、“ブッシャウ”や“シンニョ”という語を仏教術語のつもりで使ってはいても、仏教の体系にも湛然の体系にも無知でした。ここで最澄の意識にあるのは、仏教とは全く違ったものでありましょう。

B³

最澄一派は強引な論法で植物と無機物のジャウブツを主張する

さて、最澄の指導する天台宗では、シャカ-ブツ（釋迦佛）の教えを否認する連中にも、ダイジョウ（大乘）の方針を採用しない連中にも、ジャウブツの可能性を認めていました。仏教の真理を否認する連中は“イッセンダイ”（一闍提）と呼ばれ、激しく憎まれていました。ダイジョウの方針を採用しない連中、仏教の真理を否認する連中とは、ドクカク（獨覺）とシャウモン（聲聞）です。

仏教の伝承によりますと、誰にも指導されずに究極の真理を一人で会得した者（pratyeka-buddha/獨覺）も、シャーキャ-ブツダの言葉を文字通りにとる教条主義者（śrāvaka/聲聞）も、「ボーディサットヴァの活動」に意義を認めず、世の人々を苦しみから解放することに全く興味がありません。

天台宗の人々の間では、このような連中にもブツになる可能性が認められるわけですが、勇み足の癖がある最澄は、ここでとんでもない飛躍をして、“我々はすでにイッセンダイさえ許容しているのであるから、塀や瓦を許容して何の不都合があろうか”と言い出します。

非如來，非涅槃，非佛性，此の三非，永非に非ざるが故に，位に約して非するが故なり。若し「墻壁瓦礫，非情の物，永く佛性に非ず」と言はば，即ち「心の外に色等の法有り」と爲す。（『守護國界章』下之上，『傳教大師全集』2，524.12-525.2）

ヒ-ニョライ（非如來）とは，単独ブツダと教条主義者のことです。ヒ-ネ

ハン（非涅槃）とは、ボンナウ（煩惱）のことです。そして、ヒ-ブッシュャウ（非佛性）とは、壁や瓦などの無機物です。最澄によりますと、イッセンダイがブツになる可能性がないといっても、未来永劫に可能性がないというわけではないということです。同じように、壁や瓦のような無機物も、未来永劫に可能性が閉ざされているのではない。これは最澄の論法です。この問題につきましても、『拂惑袖中策』の作者は、最澄の不明晰な文章をよく補って、明快に論議を展開しています。

經文に云ふ。「非涅槃とは、有爲と煩惱なり。非如來とは、〔一〕闍提、二乘（聲聞，獨覺）なり。非佛性とは、^{しやうへき くえじやく}墻壁と瓦石なり」と。今、問ふ。「〔墻壁と〕瓦石、永く非ならば、二乘、〔有爲と〕煩惱も、亦、永く非なるや。汝、既に二乗を疑はずして、何ぞ〔墻壁と〕瓦石を斥くや」と。（『拂惑袖中策』下、『傳教大師全集』3, 316.1-3）

“壁や瓦にもブッシュャウを認めないと、一貫性を欠くことになる”と言うのです。しかしながら、いくら憎むべき存在であっても、イッセンダイは「心を備えているもの」であり、しかも人間です。一方、いくら馴染み深い存在であっても、塀や瓦は人間の作った構造物であり、無機物です。

仏教で言われているイッチャンティカ（icchantika/一闍提）は、「ブツダになる可能性が最も低い人間」ではあっても、「心を備えていない物体」ではありません。したがって、「イッチャンティカにブツダになる可能性がある」という命題が真であるとしても、仏教の立場に立つ限り、これを前提として“塀や瓦にブツダになる可能性がある”という帰結命題を導くことはできないはずで

今はブツダの教えを否認している人間も、「心の移転」を繰り返すうちに真理に目覚めることがないとは言えないかも知れません。しかしながら、仏教の立場に立つ限り、塀や瓦は「心」を備えていませんし、死ぬことがありませんから、「心の移転」が起りえません。いつかブツダの教えに帰依することがあろうと期待することはできないのです。したがって、今の人生でブツダの教えを否認している人間に「ブツダになる可能性」があるとし

ても、そのことを論拠にして無機物に「ブツになる可能性」を認めるとすれば、とんでもない論理の飛躍です。

仏教を研究する比叡山の人々の中にも、この強引な論法で主張されることに直ちに納得できない者がいました。もともと草木や岩石に心がないことにこだわり、“心のないものがブツになる”などという記述がどの經典にもないことを気にする者がいたのです（『拂惑袖中策』、314-315）。經典根拠に基づいて、この人々は“最澄の主張が理解し難い”と言うのですが、このような至極当然の疑念も強引にねじ伏せられます。最澄一派の人々にとって、“草木や岩石もブツになる”というのは、何が何でも押し通さなければならない主張であったのです。

『涅槃經』では確かにイッチャンティカがブツになる可能性を認めています。ただし、イッチャンティカのままでブツになれるなどと言っているわけではないのです。ブツになる前にイッチャンティカでなくなる必要があります。それに、生きている間にイッチャンティカでなくなる可能性は否定されていないものの、「心の移転」が視野に入っているのです。イッチャンティカでなくなったからといって、すぐにブツになれるわけではありません。まずブツになる決心をして、その後は限りないほど「心の移転」を繰り返さなければならないのです。

この經典によりますと、今イッチャンティカである者にも、ブツになる可能性が永遠に閉ざされているわけではありません。しかしながら、生きている間にイッチャンティカのままでブツになれるなどとは言っていないのです。ところが、最澄の考えているジャウブツは、「心の移転」を必要とするプロセスではありません。したがって、イッチャンティカもそのままブツになれることになります。

無機物にも「ブツになる可能性」を認める最澄の論議が成り立つには、「人間にも無機物にも、共通して内在する精神中枢がある」という前提がぜひとも必要ですが、そのようなものを仏教の体系に求めることは不可能です。しかしながら、日本文化の伝統の中でなら捜し出すことが可能です。それは

何かと申しますと、森羅万象に宿るタマです。

なお、日本のカミ（神）が好んで宿るのも古木や巨石、さらには鏡や刀などの人工物であり、この点でタマと生態が同じです。また、人間に宿っていた強力なタマがカミとして扱われ、同じように恐れられ崇められることがあります。そうしますと、タマとカミは別のものではないようです。菅原道真のタマは報復を恐れる人々に祭り上げられてカミとなりました。いずれにしましても、最澄の人間形成の基礎にあるのは、このようなタマやカミが跋扈する世界で形成された世界観であり、いくら異文化の文献を熱心に読んで仏教の研究に励んでも、そこから抜け出すことは遂にありませんでした。

最澄はブッシュウとシンニョを同一視しましたが、これは必ずしも最澄の責任に帰すべきではなく、中国文献から受け継いだものです。しかしながら、植物や鉱物にもブツになる機会が与えられているなどとは、中国人も言っていません。最澄は中国人の言うことを尊重したわけではなく、中国文献で見つけた言葉を糸口にして、日本の文化伝統の中で育まれた自分の心情を語ったに過ぎないのです。

“イッセンダイにさえ認める以上、塀や瓦に認めてどこが悪い”と言うのは確かに論理の飛躍ですが、最澄の勇み足を支えていたのは、タマの存在を当然のこととする文化でした。日本人は自然と人間を区別せず、この世に存在する一つ一つの物にタマが宿ると信じていました。気に入らない状況変化があると、このタマは強い感情で反応する習性があり、それを言葉で表現することがあります。これでは、仏教で構想された「心の移転」を受け入れる余地は全くありません。

C¹

日本では植物にタマが宿る

さて、『常陸國風土記』は925年に諸国から政府に提出された地誌の一つですが、そこに採録されているフルオキナ（古老）の話によりますと、カミ（神）が地上に降りて来ていた原始時代の日本では、草や木が言葉を話して

最澄が描いた日本文化

いたといえます。

^{ふるおきな}古老のいへらく、^{あめつち はじめ くさきことど}天地の権輿、草木言語ひし時、^{あめ くだ こ}天より降り來し神、
み名は^{ふ つ おほかみ}普都大神と稱す。(『常陸風土記』、「信太郡」、『日本古典文學大系』2, 42)

そして、743年に大仏を作ろうと決意した時、聖武は宣言文を発表しています。その中で天皇は「すべての動物と植物が榮えること」(動植咸榮)を願っています。これから制作するルシャナ-ブツ(盧舍那佛)の巨大彫像に期待されているのは、超自然力を発現してすべての動物と植物の繁榮をもたらすことです。

詔に曰ふ。「朕、……誠に^{けんこんあひゆた}三寶の威靈に頼りて、乾坤相泰かに、
萬代の福業を修めて、^{ことごと}動植咸く榮えむことを欲す」と。(『續日本紀』15, 『國史体系』2, 175)

“動植咸榮”または“動植咸宜”という言葉は仏教文献に起源がなく、儒教や道教の文献によく見られ、王者の仁徳が広く及んでいることを讃える中国語表現です(石井公成、「聖武天皇の詔勅に見える願と呪詛」、『華嚴学研究』3, 80-81)。日本人は自分たちの都合に合わせてこれを採ったのです。

謡曲『六浦』では旅先の僧に女が近づき、カエデ(楓)の紅葉について話をします。帰り際に正体を明かし、カヘデ-ノ-セイ(楓の精)であると告げます。夜になると夢にカヘデ-ノ-セイが現れ、僧に語り掛けて植物の生態について大いに語り、最後にジャウブツを願います。経典の中の一句を読んでやって、僧はこのセイの望みを叶えてやります。(『謡曲大観』5, 3007-3018)この作品では“サウモク-コクド-シツカイ-ジャウブツ”(草木國土悉皆成佛)という言葉が経典からの引用として挙げられていますが、そのような語句はどの仏教文献にもなく、日本人が勝手に作ったものに過ぎません。

謡曲『定家』で語られているのは、式子内親王と密かに契りを結んでいた藤原定家の話です。内親王の死後に、定家のココロ(心)はカズラ(葛)に取り憑きました。こうして、取り憑いた方も取り憑かれた方も、「邪淫」のせいで久しく苦痛を受けていたのです。『妙法蓮華經』の「樂草喻品」を読

んでもらって、墓石に宿る内親王のココロもカズラに宿る定家のココロも安らぎ、ジャウブツすることができました（『謡曲大観』3, 2108-2109）。『妙法蓮華經』の「薬草喩品」には、植物をジャウブツさせる超自然力があると言うのですが、これは仏教で伝えられていたことではなく、日本文化の中で成立した伝承です。「薬草喩品」で説かれているのは、「ブツの教えは多様な人々に効果がある」ということであり、植物は多様性の比喩として挙げられているに過ぎません。

セイは植物に内在するココロの具現体です。ココロは目に見えませんが、人間と話をする必要がある際には、人間の姿を取ってセイとして登場します。植物のセイはいつまでも続く厄介事に長らく悩みますが、経典を読んでもらうと楽になり、この上なく安らかになります。日本人にとりまして、このプロセスこそ謡曲で“ジャウブツ”と呼ばれる究極の境地です。

C²

日本では生命のない物体にもタマが宿る

中国語文献に見られる“三寶”（宝のように尊重すべき三つのもの）という語が指すのは、「ブツ」と「ブツの教えた真理」と「ブツの教えに専念する人々の共同体」であり、いずれも目に見えないものです。ところが、日本語で“サンボウ”（三寶）という語が指すのは、仏像（ブツ/ボサツの姿を写した金属製品/木製品）と仏典（シャカ-ブツの教えを書き記した紙製品）と坊主（僧尼令に従って生きる人間）であり、いずれも目に見えるものです。

日本人にとりまして、この三つの中で最も尊重すべきはブツザウ（佛像）であり、“サンボウ”という語の表示対象は、これに限定されることがあります（『日本靈異記』中, 33:「[頭を]三寶の前に置きて」）。聖武の宣言文に見られる“サンボウ”という表現も、ビルシャナ-ブツ（毘盧遮那佛）の巨大な銅製の彫像を指すものでありましょう。

この巨大な金属彫像には、超自然力を備えた精神主体が内在すると信じら

れています。これは“イレイ”（威靈）と呼ばれます。そして、この超自然力はすべての動物と植物に繁栄をもたらすと期待されています。ここで超自然力の源泉は無機物（銅像）に宿るイレイに帰せられ、その影響は動物だけでなく植物にも及びます。聖武は草や木にも関心を寄せているのです。

仏教文献では人間とその「心」の移転先である動物にしか関心がなく、繁栄すべきものについて述べる際には、「動物」だけを指す語が用いられます（「有情」/「衆生」）。しかしながら、聖武がルシャナ-ブツについて宣言する際には、仏教の伝承にこだわらず、植物にも言及する表現を中国古典から借りています。8世紀の日本人の間では、植物が喋っているのを見聞することはなくなったものの、もともと喋っていたと信じられていました。そして、植物にも感情があると信じられていたのです。

さて、8世紀末から9世紀初めにかけて、『日本靈異記』という説話集が日本で編纂されました。序文で編纂者の景戒自身が述べていますように、この説話集は仏教の真理を伝えるつもりで作られました。しかしながら、収録されている一つ一つの説話を検討してみると、説話という形式を借りて景戒が伝えているのは、仏教とはあまりにも異質な世界です。この点で、この説話集の資料価値は極めて高く、古代日本人が仏教と思っていたものの実態を知る上で貴重な情報を提供しています。

『日本靈異記』下巻の第28話は、寺に住んでいる男が夜中にタマのうめきを聞く話です。夜ごとに苦しげなうめき声を聞いた男は、起き出して境内を見回りますが、行き倒れの病人は見つかりませんでした。ある夜のこと、大地が響くほど激しいうめきが聞こえました。朝になって見てみますと、木製の弥勒像の首が蟻に食われて、地面に落ちていました。苦しがつてうめいていたのは、木像のタマであったのです。

中巻の第39話では、砂に埋まっていたヤクシ（薬師）の彫像が救出されます。ある僧が川の側を歩いていると、砂の中から助けを求める声がしました。掘り出してみると、両耳の欠けたヤクシの木像が出て来ました。修理して貰ってクヤウ（供養）を受けますと、この木像は人々の願いを何でも叶え

ました。ヤクシの形をした木塊に宿るタマは、砂に埋まって苦しがり、言葉を発して訴えたのです。そして、良くして貰って嬉しがり、人々に対して限らない好意を抱くようになったのです。

下巻の第29話では、子供が木塊に刻んだ稚拙な像を壊す男の話です。彫刻の真似事をして子供が木塊をブツの形に刻んでいたところ、たちの悪い男が通りかかり、これを取り上げて叩き割りました。立ち去った男がしばらく行くと、突然ぱたりと倒れ、血を吐いて死んでしまいます。叩き割られた木塊に宿るタマは大いに怒り、直ちに仕返しをしたのです。

『日本靈異記』によりますと、塔や彫刻など植物を原材料とする構造物に宿るタマは、危機に瀕すると脅え、それを声や言葉を発します。危害を加えられると、激怒のあまり徹底的に報復します。大事にされると、すっかり気を良くして、とめどなく恩恵を施し続けます。

このように、日本では人工の構造物に潜むタマには痛みを感じる感覚があり、喜びや怒りを覚える感情があります。そして、それを音声や言語で表現する習性があります。また、悪意や善意に激しく反応し、感情を行動に移す強い意志があります。日本人が生活する世界では、人間の場合と同じように、生きている植物だけではなく、生命のない物体にも、精神活動の中核があるのです。そして、このことこそ最澄一派が何が何でも押し通さなければならなかったことです。

C³

日本人はタマノ-シツメ/ジャウブツを目指す

仏教で関心はもっぱら人間と動物にあり、植物と鉱物から成る自然界は背景に過ぎません。インド文化圏の人々に取りまして、「心の移転」（「心」が新しい身体に移動すること）は議論の余地のない自然現象であり、これに関与するのは「心を備えているもの」（sattva/有情）だけです。仏教の究極目標が「心の移転」の苦しみから解放されてブッダになることである以上、「心を備えているもの」とされる人間と動物は、「心を備えていないもの」

最澄が描いた日本文化

(asattva/無情)とされる非動物(植物と無機物)と相互排除的に対立するのです。これほど日本文化と異質な文化はありません。

仏教では植物と鉱物がブツになることはありえませんが、森羅万象にタマが内在する日本では草木や岩石がブツになります(草木成佛)。したがって、「ブツになること」(成佛)は日本独自の文化事象でありまして、異文化には見られないことです。インドに起源がある仏教は、日本に伝わらなかったのです。仏教は伝わりませんでした、仏教文献は伝わりました。日本人は体系としての異文化を学ぼうとはしませんでした、異文化圏から伝わった文献を熱心に読み、そこに使われている言葉を覚え、それを転用して日本の文化を記述しました。

仏教文献に“諸法實相”という表現があります。これは仏教独特の世界観を表す表現でありまして、「現象界に存在するものの真実の姿」を意味し、「[現象界は実は]からっぽであること」(空)を指します。ところが、日本文献の中で“ショホフ-ジツサウ”(諸法實相)という表現が使われますと、「この世に存在するものはすべて、すでにそのまま、あるべき状態を呈している」という意味で用いられています。植物や無機物も日本ではすでにそのままブツなのです。安定こそが本来の状態と考えられ、この安定の破綻が異常事態と見なされていました。日本人にとりまして、ジャウブツとは本来の安定を取り戻すことです。日本で形成されていた文化環境は、「現象界は実はからっぽである」などという発想からあまりにも遠い世界であったのです。

日本文化圏では、有効な音声呪術によって異常事態が解消されます。この事象を指して、日本人は“ジャウブツ”という語を仏典から借りて転用しました。日本語で“ジャウブツ”は“タマノ-シツメ”(魂の鎮め)と同義語です。日本で“ブツ”と呼ばれているのは、仏教で構想されたブツとは縁もゆかりもないものです。“動物も植物も無機物も、そのままジャウブツできる”と最澄が言うのは、まさに日本の文化伝統に添って発言しているでありまして、仏教の体系の中で発言しているわけではありません。

膨大な数の言葉を用いて最澄が表現しようとしたのは、このように仏教と調整の余地が全くない体系でありました。これが日本で“ブツケウ”と呼ばれているものであり、1000年以上にわたって日本人の間で強い支持を受け、日本文化を構成する重要な要素となっています。

Japanese Culture As Described by Saichō

Nobuhiko KOBAYASHI

According to the ancient Indians, our mind never ceases to function even after death, and continues to live in a new body. This process is repeated forever. It follows that we cannot be freed from our suffering, which is believed to be inevitable as long as we live. Buddhists are resolved to get free by extinguishing their minds, and he who has succeeded in this operation is called *buddha*.

Buddhists of the Mahāyāna school assert that all beings that are endowed with minds can someday be *buddhas*. Animals, which act on their initiative, are supposed to be endowed with minds, whereas vegetables are not.

On the other hand, Saichō (最澄 767-822) says that vegetables can also be *butu* (佛). He even argues that minerals and artifacts are candidates for *butu*. His description reflects the ancient Japanese idea that a spiritual factor called *tama* (タマ) subsists in every existent thing, living or nonliving.